大学授業との連携による小学校の地域教材開発と授業実践

島津　俊之（和歌山大学教育学部）
三品　英憲（和歌山大学教育学部）
宇治田　乃（和歌山市立小倉小学校）
西岡　俊揮（和歌山市立砂山小学校）

Ⅰ　研究の目的

本稿は和歌山大学教育学部の 2021 年度「共同研究事業」に採択された表題の研究課題の報告である。応募申請書に記載した当初の研究目的は，「大学授業「小学校社会科基礎論」（初等教育コース初等教育エキスパートプログラム必修専門科目）及び「郷土学習の理論と歴史」（初等教育コース専門科目）と連動して，小学校社会科におけるフィールドワークを伴った地域教材開発に取り組み，授業実践とその振り返りを通じて，児童・学生・大学院生・現職教員・大学教員の 5 者の学びや認識の深化を図る」というものであった。

「第 6 回学習指導基本調査」（ベネッセ総合教育研究所 2016）によれば，小学校教員が「多くするように特に心がけている」と回答した授業方法のうち，「体験することを取り入れた授業」の選択率は 2002 年の 64.6%をピークとして 2016 年には 47.6%に低下し，「自分で調べることを取り入れた授業」の選択率は，やはり 2002 年の 54.3%をピークとして 2016 年には 31.3%にまで低下している。さらに，「表現活動を取り入れた授業」の選択率は 1998 年の 56.1%から 2016 年には 41.1%へと低下している。その反面，総合的な学習の時間（以下「総合学習」とする）に小学校教員が「よくしている」あるいは「ときどきしている」学習内容として，「地域にかかわる学習」の選択率は 83.2%に達し，第 2 位の「環境にかかわる学習」（65.9%）を抑えて第 1 位となっている。この調査結果から，小学校教員の多くは地域学習を取り入れているが，地域学習にとって必要不可欠であるはずの，「体験すること」や「自分で調べること」，そして「表現活動」への意識は低下していることが読み取れる。

平成 29 年告示の小学校学習指導要領では，社会科に関して「地域の実態を生かし…観察や見学，聞き取りなどの調査活動を含む具体的な体験を伴う学習やそれに基づく表現活動の一層の充実を図る」ことが求められており（文部科学省 2017），先の調査結果を踏まえるならば，教員養成段階での《体験》や《調査》，そして《表現》への動機付けがより一層重要になってくると考えられる。島津と三品は 2021 年度に「小学校社会科基礎論」（前期・水曜 1 限）を共同で担当し，島津はさらに「郷土学習の理論と歴史」（後期・水曜 4 限）を担当した。また宇治田は，2021 年度に和歌山大学大学院教育学研究科専門職学位課程（教職大学院）の 2 年次に在籍しつつ，勤務校（和歌山市立小倉小学校）で 6 年生のクラス担任として授業を行う立場にあった。そこで今回の共同研究では，フィールドワークを取り入れた宇治田の授業実践にいかなるフィールドや地域資料を教材として取り入れるかをディスカッションし，授業実践の現場に学生も立ち会わせることで，児童・学生・教員間の双方向的な学びや認識の深化につなげることを目論んだ。実際には，小倉小学校では総合学習と社会科をセットにした授業実践を行うことになった。また大学ではコロナ禍などの事情により，前期科目の「小学校社会科基礎論」とのコラボレーションは断念せざるをえず，後期科目の「郷土学習の理論と歴史」とのコラボレーションも限定的なものに留まった。以下Ⅱ章では共同研究の事実経過について記し，Ⅲ章では小倉小学校での授業実践に対する授業者の見解と児童･学生のコメントを紹介する。Ⅳ章では共同研究の成果と課題について記す。

Ⅱ　共同研究の事実経過

事前の打ち合わせは和歌山大学東 3 号館（南 405 地誌・地域研究実習室）にて 8 月 4 日（水）の夕刻に行い，島津・三品・宇治田・西岡が参加して共同研究の方向性について協議した。その後の電子メールによる調整の結果，小倉小学校 6 年生の総合学習におけるフィールドワークの一部を社会科の授業として扱い，地域教材開発に取り組むという方向性が定まった。総合学習では自分たちの住む地域の興味深い場所（カクタス・ニシ，光恩寺，駿河屋，まつや食堂，上小倉神社）をフィールドワークによって調べ，その結果を新宮市立三輪崎小学校との Google Classroom を経由したリモート交流会で発表することになったので，紀州徳川家とのゆかりが深い光恩寺を社会科における江戸時代学習の「フィールド教材」（攝待ほか 2012）と位置付け，光恩寺のフィールドワークを総合学習と社会科の双方に関わらせることとした。和菓子メーカーの駿河屋も紀州徳川家とのゆかりが深いが，島津が 2020 年度に担当した教職大学院科目「探究のための教材開発－地域の変化と持続性の探究」において宇治田が小倉小学校 6 年生社会科のフィールド教材とした経緯があり，今回は新たな教材開発に取り組むこととなった。

光恩寺への事前訪問は 10 月 5 日（火）の夕刻に島津・三品・宇治田・西岡が参加して行った。ちなみに同日の午後

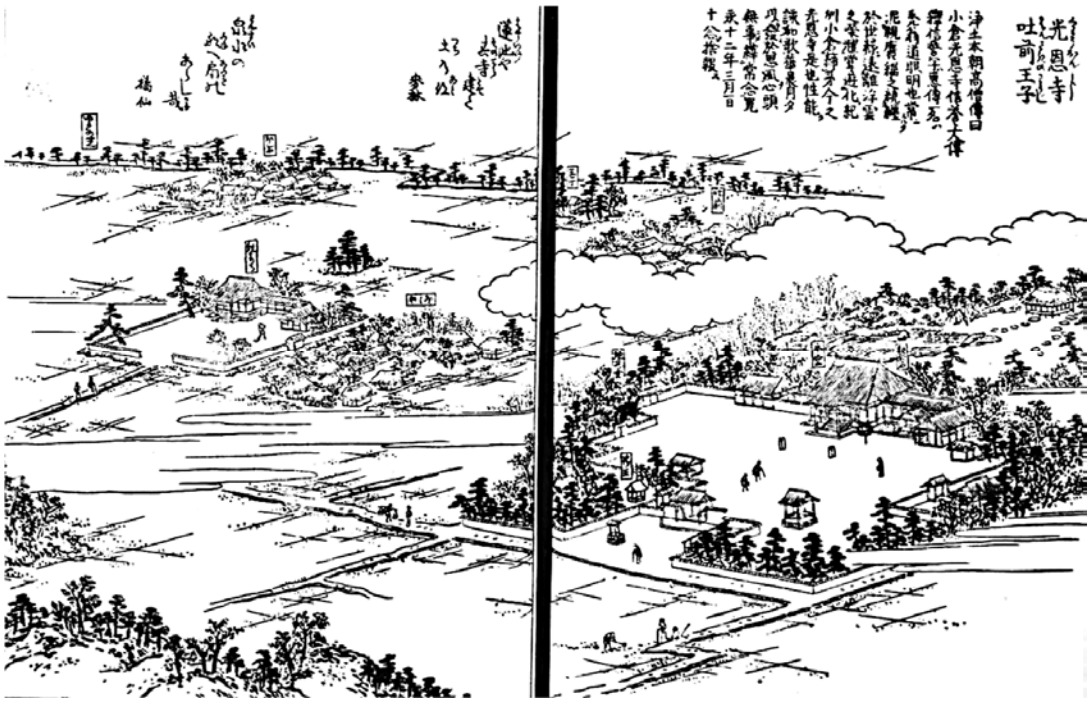

図１　『紀伊国名所図会』（巻之六）に描かれた光恩寺境内の光景（大日本名所図会刊行会 1921）

には，宇治田が総合学習のフィールドワークで多肉植物の栽培・販売を手掛けるカクタス・ニシを児童と共に訪れており，島津と三品も同行した。光恩寺では住職の江川和樹氏に案内をお願いし，地域教材としての検討を実地に行った。

光恩寺は文化 9（1812）年刊行の『紀伊国名所図会』に登場する名刹であり（**図１**），徳川家康が帰依した観智国師の弟子であった信誉上人が小倉郷の領主津田監物の要請により天正 19（1591）年に開山したとされる。津田監物家の当主は，天文 12（1543）年に種子島に伝来した鉄砲を紀州根来に持ち帰って広めたという伝承が残され，光恩寺には津田監物の墓石と伝えられるものが存在する。また，家康の三女振姫（正清院）の墓所も存在する。振姫は会津若松城主の蒲生秀行に嫁ぎ，秀行の死後に和歌山城主の浅野長晟に嫁いだが，元和 3（1617）年に世継ぎの光晟を出産後間もなく死去した。2 年後に浅野家は広島に転封となり，後を継いだ家康の十男徳川頼宣が元和 7（1621）年に振姫の墓所を光恩寺に移した。さらに光恩寺には，和歌山城の本丸御殿にあった御台所の建物が明治 13（1880）年に庫裏として移築されている（大日本名所図会刊行会 1921; 浄土宗典刊行会 1931; 松原 1996）。このような歴史的・文化的価値を有する光恩寺を，後述の宇治田の言葉を借りれば「地域の魅力に迫りながら，江戸時代を子どもたちに感じさせ」るために，どのようにフィールド教材として活用するかが焦点となった。また，児童が行うフィールドワークには，フィールドに何があり，フィールドで何を行うかを共有するための事前学習（インドアワーク）が不可欠であり，そこでは児童をフィールド教材に導くための補助教材がしばしば必要となる。島津は研究代表者として，こうした補助教材となりうる歴史資料をいくつか宇治田に提示した。このうち事前学習で実際に使用されたものを以下に示す。

①『紀伊国名所図会』― 国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧できる（大日本名所図会刊行会 1921）。光恩寺境内の絵（**図１**）と種子島の鉄砲の絵が Google Classroom で映写され，前者のプリントアウトが貼られた（**写真１**）。

②「和歌山城鳥瞰復元図」― 幕末の和歌山城を北側上空から俯瞰した大判サイズの復元図で，建物配置は④に基づく（香川・西ヶ谷 2004）。A3 サイズのコピーをつなぎ合わせたものが貼られた（**写真１**）。

③「和歌山城 VR」― 江戸時代の和歌山城を CGVR（コンピュータ・グラフィックス・ヴァーチャル・リアリティ）により動画で再現したもので，YouTube で閲覧できる（ストリートミュージアム n.d.）。建物配置は概ね②に基づく。Google Classroom で映写され，プリントアウトが貼られた（**写真１**）。

④「和歌山御城内惣御絵図」― 和歌山城の建物配置を詳細に描く絵図（和歌山県立図書館所蔵）で，寛政 9～11（1797～1799）年の成立とされる（加藤 2015）。その一部が現地の和歌山城史跡解説パネルに「本丸御殿の図」として転写され，写真画像が個人のブログ（みどりの木のブログ 2016）に掲載されている。その画像が URL を明記して Google Classroom で映写され，プリントアウトが貼られた（**写真１**）。

事前学習の授業はフィールドワーク前日の 10 月 18 日（月）に行われた。コロナ禍などの事情により，残念ながら「郷土学習の理論と歴史」の履修学生（5 名）の現場での授業参観は翌日のフィールドワークを含めて叶わず，当日の 5 限（13:45～14:30）に行われた授業を島津が参観した（**写真１**）。宇治田の授業は，事前の話し合いを出発点としつつ，独自の教材開発にも取り組んだ形跡が窺えるものであった。昼休憩後のスキルアップタイム（13:30～13:45）を利用して，予め児童に『ふるさと小倉』（和歌山市立小倉小学校 2000）の光恩寺に関わる箇所のコピープリント（B4 サイズ 8 枚）を配付し，フィールドに何があり，どのような歴史や言い伝えが残されているのかを読み取らせることから授業は始ま

った。Google Classroom と黒板を用いて，前述の①～④に授業者が独自に加えた写真や資料を提示しつつ光恩寺にまつわる歴史事象について説明した後，『ふるさと小倉』の読み取りからわかったことの出し合いへと授業は展開していった。児童は光恩寺にゆかりの深い信誉上人や津田監物，振姫などに関して積極的に発言した。後半は，授業者が岩出市民俗資料館から借り出した火縄銃の実物を児童に触れさせるという，児童にとっての《サプライズ体験》が用意されていた。さらにゲストティーチャーとして，根来史研究会・根来鉄砲隊に属して演武を行っている高倉理行氏（社会福祉法人哲人会・小倉園園長）から鉄砲隊と火縄銃について説明をいただいた。児童にはワークシートが配付され，①火縄銃を持ってみての感想，②フィールドワークで見る・聞く・調べること，について書くことが求められた。

翌日の 10 月 19 日（火）のフィールドワークには島津と三品が参加した。小倉小学校から光恩寺までは約 1.2km で，児童の足で片道 20 分程度の距離である。光恩寺では 5～6 限の時間を使って 13:30～15:10 の予定でスケジュールが組まれていたが，当日の午後は折悪しく雨模様で，2 クラス 40 名の児童の到着はやや遅れ，また肌寒かったこともあって 14:30 で切り上げることになった。当日はゲストティーチャーとして小橋勇介氏（和歌山市立博物館学芸員）に参加をお願いし，「校外学習・光恩寺」と題する A3 サイズ両面コピーのプリントを配付して，光恩寺の歴史について説明をいただいた（**写真２**）。当該のプリントには，前述の①『紀伊国名所図会』所収の種子島の鉄砲の絵が載せられていた。その後児童たちは班に分かれ，和歌山城から移築された庫裏，振姫の墓，津田監物の墓，鳴かない蛙の言い伝えが残る池などを見学したり，小橋氏へのインタビューを行ったりした。最後に児童は前日のワークシートに，フィールドワークで分かったことや感想を書くように求められた。

フィールドワークの翌週の 10 月 26 日（火）の夕刻に，和歌山大学東 3 号館（南 405）に島津・三品・宇治田が集まって共同研究の振り返りを行い，今後の方向性について協議した。翌日の 10 月 27 日（水）には，「郷土学習の理論と課題」の授業（14:50～16:20）で宇治田の授業実践（事前学習とフィールドワーク）を紹介し，5 名の履修学生とディスカッションを行った。その際，当日撮影した写真と動画を映写し，また授業で配布されたプリントを見せるなどして，学校現場での授業の実際を学生が少しでも体感できるように努めた。

その後児童たちは，三輪崎小学校との交流会に向けて，光恩寺を含めた小倉地区の 5 か所を紹介するスライド作りを班に分かれて進めた。また並行して，当該の 5 か所に関するクイズが QR コードで埋め込まれた「小倉検定てくてくマップ」の作成も行われた。交流会は 11 月 29 日（月）の 10:25～12:00 に Google Classroom を経由した Google Meet で行われ，島津と「郷土学習の理論と歴史」の履修学生のうち 4 名がオンラインで参観した。交流会は三輪崎小学校の 6 年生と小倉小学校の 6 年生がそれぞれの地域におけるフィールドワークの成果を発表し，活発な質疑応答がなされた（**写真３**）。交流会の様子は同日夕刻のテレビ和歌山のニュースで報道され，また『わかやま新報』の 12 月 1 日（水）の紙面で紹介された（わかやま新報 2021）。前述の「小倉検定てくてくマップ」は PDF で公開され，マップ上の QR コードから Google フォームのクイズ画面に入ることができ，クイズの採点結果や正解，そしてフィードバックのコメントを見ることができる。さらに，ゲストティーチャーの高倉氏が園長を務める小倉園の協力により，児童がデザインした「検定認定シール」も作成され，三輪崎小学校の児童にプレゼントされた（和歌山市立小倉小学校 2021）。

以上のような共同研究の経過を踏まえて，研究代表者の島津が共同研究者 3 名の確認を経て本稿を最終的に取りまとめた。なお，本稿の内容は，2022 年 2 月 12 日（土）に開催予定の「2021 年度和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告会」で口頭発表を行うはずであったが，コロナ禍の再燃（第 6 波）により当該報告会の開催は中止となった。

Ⅲ　授業者の見解と児童・学生のコメント

最初に授業者の宇治田の見解を以下に要約して示す。

- 歴史学習を進めるにあたり，歴史に関心を持たせる。徳川幕府や江戸時代と小倉地区をつなぐ回路として光恩寺を取り上げ，大きな歴史を身近に感じさせる。江戸時代と自分がつながり，刺激を受け子どもたちの心に何かが残ればと思って取り組んだ。火縄銃を実際に触り，和歌山城の庫裏の柱の太さを直接見ることなどから体に感じるものを大切にし，意外と歴史は現代の自分たちの手の届くところにあることを実感させたい。事前授業で光恩寺にあるもの，見られるものを知り，何を調べたいか目的意識を持たせる。現地のフィールドワークでは実際のものを見て，話を聞いて，感じさせたい。光恩寺の学習では，地域の魅力に迫りながら，江戸時代を子どもたちに感じさせたい。
- 問いを立てて思考する機会にしてもよかった。事実をもとに想像することで思考し，子どもたち同士で話し合って判断させる。例えば「振姫の墓を和歌山城に近い吹上寺から光恩寺に頼宣が改葬したのはなぜか」や「種子島時尭や津田監物は新兵器である火縄銃をなぜ公開して広めたのか」など，人物の思いや戦略を考える授業でもよかった。地理的なことと関連させて大和街道や紀の川の交通の要所としての光恩寺の場所を考えさせたり，時と関連させて鉄砲伝来でもたらされた火縄銃が長篠の戦いで使われたこと，徳川頼宣や振姫が自分たちの住む紀州にいたことなど時の流れを意識させるなどの方法もある。

次いで小倉小学校の 6 年生のコメントの一部を，事前学習・フィールドワーク・交流会に分けて示す。

〔事前学習〕

- 光恩寺はいつからあるの？なぜ光恩寺という名前？光恩寺と根来寺との関係は？お墓は何基ありますか？
- スライドでは，津田監物さんは火縄銃をもってきたえらい人だとよくわかりました。

- 火縄銃はすごく長くて重い。打つ時長すぎて打ちにくい。短時間持っていても手が痛くなるし，肩が痛くなりました。
- 火縄銃は重いから長篠の戦いで３人でくるくる回っているからすごいと思った。一生さわることができないことを実現できてうれしかった。
- 火縄銃に桜のような模様があり，なぜあるのか疑問に思いました。

〔フィールドワーク〕

- 光恩寺に使われている瓦が徳川家のマークだったことがすごいと思った。
- 小倉地区にえらい人のお墓があるからそれを守っていきたい。津田さんのお墓の近くに小さい建物があって，その中に光恩寺を建てた人が入っているらしいけど，屋根の瓦の家紋が徳川家のものじゃなかったのでなぜだろうと思った。
- 光恩寺に行って一番すごいと思ったことは庫裏の上にある柱がとても昔の木を使っているということです。
- 私たちはすごい人のいる地域に住んでいるから，その人を誇る気持ちでいたい。
- 他の墓は四角かったけど，昔の人の墓は丸いお墓でした。この下に昔の人が眠っていると思うとすごい。鳥肌が立ちました。
- 振姫様はおなかに赤ちゃんがいるのに和歌山城で産むためこっちに来たっていうのにびっくり。だれかのために動いて亡くなった振姫様はすごいと思った。
- 光恩寺に行って思ったのが，こんなにすごい人がいるんだと再認識しました。昔は，一人の命よりも，跡継ぎなどを優先するんだなと思ってしまいました。
- 印象に残っているのは津田さんのお墓です。光恩寺の中でもけっこう大きくて，歴史を感じられたからです。私たちは歴史ある光恩寺を守って受け継いでいかなければいけないなと思いました。

〔交流会〕

- 三輪崎小学校の質問に困ったけどおもしろかったです。スライドを作るのが楽しかったし，他の学校とも交流できてよかった。またこういう機会があればしたいです。
- インタビュー内容を考えて練習したり，実際に見学してみたりして，スライドにまとめたりクイズを作ったりしてとても楽しかったです。そして三輪崎との交流もしてたくさん学べました。
- 司会をさせてもらうことになって，はじめは心配で緊張したけど，やっていくうちに慣れてスラスラ言えるようになっていったのでよかったです。本番では練習の時よりスムーズにできて，注意していたところが改善されて私的には大成功だったんじゃないかなと思います。

最後にオンラインで交流会を参観した学生のコメントを要約して示す。

- 小倉小学校の発表は，アニメーションを駆使していたり，インタビューや食レポの動画，クイズを盛り込んで，発表を聞く人を飽きさせない工夫がなされていると感じました。小学生が，ここまで，レベルの高い発表が出来ると正直思っていなかったので，今回の交流会はすごく私にとって刺激的なものでした。子どもたちの可能性は，無限大だなと感じているところです。
- 自分の予想を超える子どもたちの発表を見ることができ，とても勉強になりました。それぞれの班の子どもたちが地域の魅力について，インタビューや写真，図を取り入れるなどしてパソコンを使いこなしながら発表しており，聞き手にとってとても興味深い発表でした。小倉小学校の子どもたちの発表では，校区の様子がとても伝わってきました。実際に足を運んでインタビュー調査がなされていることで，地域の人々とのつながりも生まれた発表であったと思います。また，クイズもあり，聞き手も楽しみながら参加させていただくことができました。全体的に今回の発表会では，子どもが主体となり，子どもたちの進行によりスムーズに進み，ここまで先生方の介入がなく，子どもたち自身で場を回している場面を見ることは初めてでした。

Ⅳ　共同研究の成果と課題

今回の共同研究では，①歴史学習に寄与する新たな地域教材の開発に取り組み，②授業実践とその振り返りを通じて関与者（児童・学生・教員）の学びや認識の深化を図ることを主な目的とした。このうち①の地域教材開発については，『紀伊国名所図会』は宇治田の 2020 年度の駿河屋を扱った授業（Ⅱ章参照）で既に用いられたが，フィールド教材としての光恩寺の導入は新たな試みであり，関連する諸資料（和歌山城鳥瞰復元図・和歌山城 VR・和歌山御城内惣御絵図）の利用も新たな教材開発の一環といえる。さらには，火縄銃の現物やゲストティーチャー（高倉理行氏・小橋勇介氏）の導入も，同様の試みの延長上にあったといえよう。こうした新たな教材開発の試みがどの程度成功したかの判断は難しいが，児童のコメント（Ⅲ章参照）を読む限り，「意外と歴史は現代の自分たちの手の届くところにあることを実感させたい」とする宇治田の目標は一定程度達成されたと考えても良いのではないか。児童たちは事前学習で火縄銃の実物に触れられることに率直な驚きと興味を抱いていたし，火縄銃と長篠の戦いにおける織田軍の《鉄砲隊三段撃ち》を結び付けたり，既習の鉄砲伝来の知識と津田監物を結び付けるコメントがみられた。フィールドワークでは，屋根瓦にみられる三つ葉葵の紋章に徳川家とのつながりを実見して驚いたり，家康の三女の墓を通じて大名家に嫁いだ女性の生き方に想いを馳せたり，津田監物の墓の古さから歴史を実感したというコメントもみられた。「えらい人」「すごい」「びっくり」といった率直なコメントは，児童にとっての「実感」を直截に物語るものといえよう。

②の関与者の学びや認識の深化については，ほとんどの児童は，徳川家康は知っていても，津田監物や振姫のことは知らなかったと思われる。ましてやこれらの人物の生きざまが，教科書で扱われるような「大きな歴史」につながっている（とされている）ということを，児童は今回の授業を通じて初めて学ぶことができたのではないか。また事前学習

では光恩寺と根来寺の関係や火縄銃の紋様について問うコメントがみられ，フィールドワークでは屋根瓦の紋様の違いについて問うコメントが出るなど，学んだことをベースに認識をさらに深めようとする態度もみられた。さらには，自らの命と引き換えになった振姫の出産を「跡継ぎなどを優先する」と捉えたり，「光恩寺を守って受け継いで」ゆくべきとするなど，認識の深化を示すコメントもみられた。今回の授業実践は，児童の学びや認識の深化に一定程度は寄与したといえるのではないだろうか。一方で「郷土学習の理論と課題」の履修学生に関しては，事前学習やフィールドワークの参観が叶わず，コラボレーションの効果は限定的といわざるをえない。それでも，宇治田の授業実践を写真や動画などで体感した学生たちは，火縄銃やゲストティーチャーの手配を含めた事前学習における授業準備の労力や周到さに驚いていたし，事前学習があればこそフィールドワークでの《体験》や《調査》が活きたものになる，ということを学生は理解できていたと感じる。さらに，交流会を参観した学生のコメントからは，児童に《表現》させることの重要性の認識や，児童の《プレゼンテーション力》への驚きなどが読み取れる。大学教員に関しては，本稿を取りまとめた島津は，小学校の授業現場において多様な歴史資料やゲストティーチャーの語りが《教材》としていかに機能するのかや，それらの可能性と限界などに関して，多少なりとも認識を深めることができた。全体として今回の共同研究においては，様々な制約の中で，上述したような一定の成果をあげることができたのではないかと考える。

今後の課題としては，宇治田が示唆するように，事前学習とフィールドワークを貫く《問い》に基づいて，児童たち自身が思考し判断し表現できる授業を創るという方向性が考えられよう。また，「江戸時代を子どもたちに感じさせ」るという授業の目標に対して，今回の教材の分量が適正であったかどうかは，引き続き吟味が必要であろう。

もう１つの課題は，今回の授業で扱った歴史事象の事実性に関わるものである。津田監物の種子島渡航伝承は，その事実性をめぐって論争が続いている（所 1977, 1994; 太田 2007; 宇田川 2015; 村井 2016）。長篠の戦いにおける《鉄砲隊三段撃ち》も，歴史学界ではフィクションとする見方が有力である（湯浅 2018）。土屋（2001）は歴史の体験的学習を，「今と昔の違いを知る」ための学習から，学習者自らが「歴史」を描くための学習へと発展させるべきとする。これは，歴史資料が「書き留められた背後に，どんな史実が隠れているのか」（村井 2016）を探る歴史学習へとつながる。津田監物は《鉄砲を伝えたからすごい》というより，むしろ《鉄砲を伝えたとされているからすごい》のかもしれない。歴史資料を，背後の《事実》への扉を開く《語り》として教材化することも，今後の課題となってくるだろう。

［引用文献・ウェブサイト］※ウェブサイトは全て 2022 年 1 月 6 日最終閲覧

宇田川武久 2015. ふたたび鉄炮伝来論：村井章介氏の批判に応える. 国立歴史民俗博物館研究報告 **190**: 1-28.

太田宏一 2007. 堺鉄炮鍛冶と紀州. 宇田川武久編『鉄砲伝来の日本史―火縄銃からライフル銃まで―』55-82. 吉川弘文館.

香川元太郎・西ヶ谷恭弘 2004. 和歌山城鳥瞰復元図. PHP 研究所編『和歌山城―南海に偉容を誇る紀州徳川の牙城―（名城を歩く 15)』特別付録. PHP 研究所.

加藤理文 2015. 紀州 55 万石の御殿 和歌山城. 週刊日本の城 **109**: 1-4.

浄土宗典刊行会 1931.『浄土宗全書（第 17 巻)』浄土宗典刊行会.

ストリートミュージアム n.d. 和歌山城. https://www.streetmuseum.jp/historic-site/shiro/2022/01/02/293/

攝待尚子・髙橋真実・長島康雄 2012. フィールド教材開発のための台原森林公園の基礎調査概況―毎木調査と樹冠写真―. 仙台市科学館研究報告 **21**: 55-60.

大日本名所図会刊行会 1921.『大日本名所図会（第 2 輯第 8 編 紀伊名所図会 2 巻)』大日本名所図会刊行会. https://dl.ndl.go.jp /info:ndljp/pid/959921

土屋武志 2001.「体験的」歴史学習の教育的意義―歴史的思考力の本質―. 愛知教育大学研究報告・教育科学編 **50**: 171-178.

所 荘吉 1977. 疑問の人物津田監物について. 銃砲史研究 **95**: 1-14.

所 荘吉 1994. 津田流鉄砲口決記について. 銃砲史研究 **256**: 1-12.

ベネッセ総合教育研究所 2016. 第 6 回学習指導基本調査 DATA BOOK（小学校・中学校版). https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=5080

松原正勝 1996.『光恩寺案内記』光恩寺.

みどりの木のブログ 2016. 和歌山城の紹介 7 裏坂道から二の丸 人形の根っこと花. https://ameblo.jp/idryou/entry-12159770076.html

村井章介 2016. 鉄砲伝来と倭寇勢力：宇田川武久氏との討論. 国立歴史民俗博物館研究報告 **201**: 81-96.

文部科学省 2017.『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 社会編』文部科学省.

湯浅大司 2018. 長篠・設楽原の戦いは「鉄砲隊」vs「騎馬隊」だったのか. 日本史かわら版 **5**: 1-2.

和歌山市立小倉小学校 2000.『ふるさと小倉―その姿と心―』和歌山市立小倉小学校.

和歌山市立小倉小学校 2021. 小倉検定てくてくマップ. https://www.wakayama-wky.ed.jp/ogura/wp-content/uploads/sites/70/2021/12/39c8c8dc5010c43c549e301ffe5f89fc.pdf

わかやま新報 2021. 修学旅行前にオンライン交流 小倉小の児童. https://www.wakayamashimpo.co.jp/2021/12/20211201_105652.html

写真１　小倉小学校６年生の事前学習の光景（2021 年 10 月 18 日 島津俊之撮影）

写真２　光恩寺でのフィールドワークの光景（2021 年 10 月 19 日 島津俊之撮影）

写真３　三輪崎小学校との交流会での小倉小学校６年生のプレゼンテーション（2021 年 11 月 29 日 島津俊之撮影）